

# 勝林寺寺報

## 家か家庭か



妙なことを言うようですが、昔は家庭といわれたものが、今ではだんだん家になっていきつてあるように思われます。「家」という字は、屋根の下に豚がいることを表したものといいます。ところが「家庭」とは、庭はまっすぐ地ならしした道のこと、すじ道のある規律ある家をあらわします。とすれば私たちの住居はどちらでしょうか。家でしようか。家庭でしようか。

今日の若者たちとつきあつて思うことは、家庭でのしつけがなくなっているということです。たとえば、大学生になつても、他家の玄関で正しい靴のぬぎ方ができぬものもいます。私たちが社会の中で生きしていくためには、人間として最低身につけておくべき作法というものがあるはずです。それはいつ、どこで学ぶのでしょうか。当然に幼いころからの家庭教育によるほかありません。

今から七十年まえ、インドで狼にさらわれて育てられていた少女が発見されました。はじめは狼と同じように、夜になると四足で走つて鳥をおそうなど、肉食しかしませんでした。人間生活に立ちかえらせるために、いろいろ教育をほどこしましたが、両足で歩くのに三年かかり、言葉は九年かかつて、やつと四十五語しか理解できなかつたといいます。

人間は人間の子として生まれたから人間になるのではありません。幼児期における家庭教育の大切さが思い知られる話です。

2×8=16と5×5=25

昔ある武将が三人の子どもを呼びよせて、一本ずつ矢を取らせて折るように命じました。矢はかんたんに折れました。ところが今度は、三本の矢をたばねて折るよう申しましたが、誰も折ることができませんでした。そこでこの武將は、子どもたちに向かつて、一人一人では力は弱いが三人がよく協力して事にあたるならば、大きな力となつて、いかなる苦難にもうちかつことができる」と諭しました。有名な「三つの矢」の教訓であります。

そこで私が考えることは、夫婦というものは、数字でいえば、足して10という数になるようなものだと思います。2と8を足しても10になりますし、また5と5を足しても10になります。ひとつが夫で、もうひとつが妻というわけです。夫婦の仲といふものは、時にはマイナス計算となつて8から2を引いて6となり、満数の10を下まわることもありますが、二人が仲良く協力しあつて、掛け算をすることができるならば、いちばん仕合せだと思います。ことにその掛け算でも、 $2 \times 8 = 16$ ですが、 $5 \times 5 = 25$ になります。夫が5で妻が5の場合、一人が平等に仲良く同じだけの力を出し合つて協力した時、いちばん大きな力になるわけです。

これが家庭円満、夫婦仕合せの基本原理だと思われます。(信楽峻磨遺稿法語集より)

## ご案内

勝林寺に春の訪れを告げる「仏婦総会」「春彼岸」のご案内です。今年も長く厳しい冬を堪え、無事に春を迎えた喜びを皆で分かち合いましょう。

### 平成二十七年度

#### 勝林寺仏教婦人会総会

日時 平成二十七年三月二十一日(土)  
午前九時半より

十七日(火) 浜孝司宅 五十四回忌  
二一日(土) 勝林寺仏婦総会

一四日(土) 長谷川進宅 五十回忌  
湯口美行宅 一七回忌

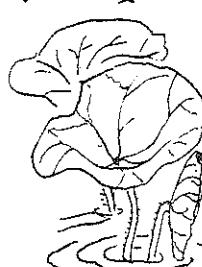
二二日(火) 出石組 組内会  
三三日(日) 出石組 組内会

二六日(木) みのりを聞く会  
二七日(金) 兵庫教区 組長会  
二八日(土) 宮窯小好宅 一周忌  
二九日(日) 田中 七回忌

彼岸会・合同役員会  
出石組總代評議員会

①報告総会  
②物故者追悼法要  
③記念法話  
④アトラクション  
⑤会員懇親会食

地区評議員さんに参加の取りまとめをしていただきます。(詳細は別紙案内)



## 春の彼岸会法要

日時 平成二十七年三月二十一日(土)

午後二時より

内容 法話(講師 勝林寺住職)

(敬称略)

当日、出石の町は「初午祭」が予定されています。寺前の道路が車両通行止めになるなど、参加者並びにお参りの皆様には、歩行や駐車にたいへん不自由をおかけしますことを承ください。

## 三月 勝林寺 予定

二日(月) 西本 一周忌

八日(日) 数森元博宅 一周忌

十三日(金) 谷垣 栄宅 忌明

十四日(土) 長谷川進宅 五十回忌

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

彼岸会・合同役員会

出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会

六日(金) 兵庫教区 組長会

七日(土) 宮窯小好宅 一周忌

八日(日) 田中 七回忌

九日(月) 出石組總代評議員会

二日(月) 池田 一七回忌

三日(火) 浜孝司宅 五十四回忌

四日(水) 出石組 組内会

五日(木) みのりを聞く会</p

わたしの生きてきた昭和 4

定時制の生徒たちとの学びの思い出は次々に浮かびます。王朝貴族の日記・物語文学——朗誦してそのままさらしさに酔つた反面、今様・旋頭歌を歌つたくぐつ（人形遣いの旅芸人）巫女などの歌姫、さらに、飢饉・天変地異の中で地獄に墮ちた人々、ツルソメ（犬神人・寺社の隸属民）などの寄生虫のような集団、追いはぎ、盜賊などなど、泥沼の中に生きる人たちの呻き声を、彼らの歌に聞こうと努め、教材として取り上げました。さらに、近代、歐米先進国に負けるな追い越せという、明治維新後の富国強兵の軍国主義の中で、どれほどたくさんの中差別を生んでいったかという点にも目をそむげず、女工哀史、蟹工船なども読んでみました。私は、当時部落解放に関心をもち、生徒と一緒にそれを「日本史」や「倫理社会」の授業の中で勉強していました。新築校舎の最上階に「解放研」の一室をもらい、そこでよく生徒と話しあつたものです。

昭和三十八年で定時制は閉鎖され全日制へと移行しました。移つてからの数年、高教組とう教員労働組合の専従職員になりました。誰もがいやがるポスト、わたしはそれをいいことにして自分の勉強に打ち込みました。定時制主事をしておられた先生の大字通信講座に誘われて沢鶴久孝（おもだかひさたか）先生の万葉講座に参加して学び、併せて日本史を勉強しなおしました。専従員は、授業時間が大幅に削減されており、勉強にはありがたい四年間でした。

昭和五十五年で退職。その翌年、長年病臥中だった前住職夫妻が相次いで亡くなりました。この前住職夫妻は、生涯「私は中継ぎ。次の住職に勝林寺を無事に引き継ぐだけが私の仕事」と平生言っていました。とはいって、三人の遺児

の教育、本堂内外の改装など大変な足跡を残し、のみならず、出石組組長、教区会議員、本山に出て、宗会議員（国でいえば国会議員）。戦後の宗門改革に貢献しました。繼父は学歴がなくそ のため漢語聖典が読めませんでした。が、かわ りに和語（蓮如上人）ご一代聞き書き・ご文章）に、ただただ生きた人でした。蓮如上人は、物 心つくつかつかぬ幼児期に、その生まれの卑しさゆえに、産みの母から引き裂かれました。繼父 は、その心を受け継いだのか、身分差別への反 撃が強く、それはさらにわたしにも幼いころが ら引き継がれることとなりました。私の幼い日、 家にはいつも中国・韓国の行商人が宿泊し、祖 母や母が手厚くもてなしていたのを覚えていま す。ある村の「お同行」と呼ばれる方は、法要 ごとに立派な「かたぬぎ」をつけて「賽錢ふり」 をしていましたし、その寺のご住職は、うちの 法要には出勤してくださいました。このころ本 堂の結界（僧侶と参拜者の間を隔てる柵）が撤 去されました。蓮如上人の「同座」の教えに学 んだものだと思われます。蓮如さまは、ご門主 になられるやいなや本堂の上段下段を撤廃し、 同座の教え（同一念仏名別道故）同一に念佛し て別の道なき故に）を実践なさったそうです。 蓮如上人は「説教者」ぶることを自ら戒め、「お のしり顔」「こころえ顔」「獨覺心」（これこれを あの人にしてやつている）という「こころを煩惱 の典型と戒めました。いわゆるこの「売り」、「 買る」の教えは、「同座」の教えと並んで蓮如上 人の教えの根幹です。大学を卒業したばかりの私 に繼父は「わしは勉強してらんでわからんけど 蓮如さまは仏法は無我とおっしゃった。皆でし もども親様のお呼び声・念佛をありがたやも「 たいなやと聞かせてもらうだけ。説教者になつたらあかん。それが浄土真宗の教えや。」と繰り 返し言い伝えました。

法語カレンダー三月 (H.P.より一部抜粋)  
死んで往ける道  
死んで往ける道  
死んで往ける道  
(前略) 人生は別れと出会いの連続だとも言ふ  
されています。生まれてこの方、どれだけ多くの  
人と出会い、縁あつた方がどれだけ先立つて  
かれしたことか。

どすん 知り合いのお葬式に参列した住職が、いつもより膨らんだ紙袋を持ち帰ったのが気になつて（笑）、早速開けてみました。中には二つの包みが入っていました。一つには、「会葬お札」と書かれ、仏時用の袋のセットが入っています。もう一つは少し大きくて、コーヒーと紅茶とお菓子が彩りよく組み合わせて入っています。（ずいぶん丁寧なお礼だな）と思いながら、書面を見て驚きました。本来なら、忌明法要を無事こ

も死を抱き込んで生きている、それが私どもの人生であります。この世において、もし死と いうものがないとすると、生というものの意味はなく、生のない死もなければ、死のない生もありません。私自身もそうですが、死にたくないのは事実です。しかし生きている限り、いつかやがて死んで往かねばなりません。そのことがまた生きることの力になり、支えになつて いるのも確かです。いつまでも、どこまでも、走 れ、走れ、とアクセルを踏み続けています。

生死出ずべき道を求められた宗祖親鸞聖人は元祖法然聖人に出遇われ、お念佛の教えを依り どころとされました。その生涯はまさに、いつ死んでも大丈夫、いつまで生きてても大丈夫とい う大きな安心があつたのではないでしようか。

（）

知り合いのお葬式に参列した住職が、いつもより膨らんだ紙袋を持ち帰つたのが気になつて（笑）、早速開けてみました。中には二つの包みが入っていました。一つには、「会葬お礼」と書かれ、仏時用の袋のセットが入っています。もう一つは少し大きくて、コーヒーと紅茶とお菓子が彩りよく組み合わせて入っています。（ずいぶん丁寧なお礼だな）と思いながら、書面を見て驚きました。本来なら、忌明法要を無事に終えた報告をかねて、お供えをいただいた方々にお礼としてお返しする品の先渡しでした。（改めてお礼をするのが、面倒だったのかなあ・）一気にお悔みの気持ちが萎えていくのを感じました。きっと、家族の死を受け入れることさえままならない状態で、葬儀屋さんに勧められるままにされたのでしょう。責めるつもりなどありません。ただ、儲けのためなら、人の誠意までもないものにしても平気な、業者の姿勢に憤りを感じました。そんなことのあつた数日後、しばらく我が家で過ごしていた実母を但東町の家に送りました。次の日、様子をたずねる電話をすると、「あんたが帰つたあとに、前の家のおじちゃんが顔見に来てくれたし、そのすぐあとにAさんが、お見舞いのお返しを持って来ててくれた」とうれしそう。多分、おじちゃんが、母が戻つたことをAさんに知らせてくださつたのでしょう。それを聞いてすぐに、Aさんは母を訪ねてくださつたのです。わずかなお見舞いにお返しなんてと思いつつ、そのお気持ちがありがたくて、もつたいたくて。お返しは、物を返すことではなく、感謝の気持ちをお返しすることだと改めて思いました。そのあと母は、胃の手術をされたその方と、自分が受けた手術の事などたくさん話したそうです。心からその方の回復を喜んでいるようでした。（文責 坊守）